演題番号：D6

肺疾患に続発し肺葉捻転を生じた犬の２例

○濱田　興[1)]，正田晃一[2)]，田村兼人[3)]，岩永優斗[1)]，田中　舞[1)]，松永朱里[1)]

[1)] Kyoto AR 動物高度医療センター，[2)] にじょう動物病院，[3)] たむら動物病院

1. はじめに：肺葉捻転は犬および猫において稀な疾患であり、原発性だけではなく肺や胸腔疾患に続発することが知られている。続発性の肺葉捻転は乳糜胸などの胸水貯留に由来するものが多く、肺疾患に由来するものは少ない。今回、肺疾患を伴い異なる機序で肺葉捻転を生じた犬の２例を経験したのでその対応について検討した。

2. 材料および方法：症例１は11歳0ヶ月齢の去勢雄のポメラニアンであり、本院受診の２日前に食欲不振および呼吸困難を認め、紹介医を受診した。Ｘ線検査にて左肺前葉における不透過性の亢進を認め、本院を受診となった。症例２は５歳11ヶ月齢の去勢雄のイタリアングレーハウンドであり、本院受診の２日前にドッグランにて同居犬と衝突後から咳嗽および喀血を認め、紹介医を受診した。Ｘ線検査にて右肺前葉における嚢胞を認め、本院を受診となった。２症例とも本院受診時にＸ線検査、超音波検査、CT検査、気管支鏡検査などの各種検査を実施後、肺葉捻転と診断し肺葉切除を実施した。

3. 結　果：症例１は紹介医のＸ線検査と同様の画像所見を認めたため、左肺前葉における捻転と診断した。また、摘出した左肺前葉において結節を認め、病理組織学的検査から肺腺癌と診断した。症例２は紹介医のＸ線検査で右肺前葉における嚢胞が明らかであったが、捻転は認められなかった。しかし、本院初診時の画像検査では右肺前葉における嚢胞内貯留液の増加を認め、嚢胞の背側に右肺中葉が変位し捻転が明らかとなっていた。２症例とも肺葉切除後に臨床症状は改善し、合併症もなく経過は良好である。

4. 考察および結語：肺葉捻転は右肺中葉と左肺前葉に好発する。過去の報告では肺疾患に由来した肺葉捻転は症例1のように捻転した肺葉に肺疾患が存在するとされている。しかし、症例２において右肺前葉における肺嚢胞が隣接する右肺中葉の解剖学的位置を変位させ捻転を誘発したと考えられた。また、肺嚢胞は貯留液の増加によりその体積および重量が変化する可能性があり比較的短期間で隣接する肺葉の解剖学的位置を変化させる可能性が示唆された。肺葉捻転は致死的となりうる疾患であり、右肺前葉における肺嚢胞を認めた場合、隣接する右肺中葉の肺葉捻転が生じる前になるべく早期に右肺前葉の外科的切除を実施すべきであると考えられた。